月報

古代史ニュース

2023.6.30.
N0.325

古代史教養講座　創立1995年

メール・アドレス
kys4s@jcom.zaq.ne.jp

7月1日ゼミは開催します

当日の時間割は、ゼミ講演が約２時間で、残り１時間半は拡大世話人会（幹事会）を行います。尚、拡大世話人会は、会員の皆さんも参加できます。参加して、当会の運営にご意見を開陳して下さい。

「ホモサピエンスの新大陸への拡散」と「新大陸で芽生えた高度文明」

―７月１日ゼミ紹介文：磐城　妙三郎会員記―

従来からホモサピエンスの新大陸への拡散は約１万３千年前（前１万１千年）の北米大陸に独特の槍先を持つクロービス文化に始まるとされてきた。ベーリング陸橋を超えてアラスカ西沿岸部に滞留していた人々が、最終氷河期末期に北アメリカの北東部と北西部にあった巨大氷床が縮小してその中央部に無氷回廊が開通したことで、大陸各地へ拡散したとされてきた。ところが２００８年に南米チリの古代住居跡（１９７６年発見）の年代測定の結果、クロービス文化より約１０００年以上古い事が判明した。また２０１０年代には北米大陸でもさらに５百年古い約１万４千５百年前の地層から石器などの発掘が次々と発表された。となると無氷回廊が開通される以前に別のルートによって新大陸へ拡散したとする仮説が必要となる。またアメリカ先住民の遺伝子的起源についてはミトコンドリア DNA の解析から東アジアとする説が通説であるのに、アメリカ先住民はアジア人の風貌に似ていないことに疑問が持たれていた。シベリアのマリタ遺跡で発掘された２万４千年前の古人骨のゲノム解析から現代の西ユーラシア人とアメリカ先住民に見られる要素が見られたという。その後、新大陸へ拡散した人々が約１万年以上の時代を経てマヤ文明を代表する多くの文明を生み、ヨーロッパ人によって征服されるまで存続した。中でもマヤ文明は神話、伝統宗教が現代にも引き継がれており、遺跡ではエジプトのピラミッドを凌駕する神殿ピラミッドをはじめとする大型建築物やマヤ文字、マヤ数字、天文、観測、マヤ暦などの考古資料を残している。世界四大文明にせまる高度文明を構築していたことが、新たな遺跡の発見、マヤ文字の解読、マヤ暦の研究などによって明らかにされようとしている。今回のゼミでは「アメリカ先住民の起源とアメリカ大陸への拡散」と「マヤ文明の概要」についてお話しします。以上。（講演時間は約２時間）

ゼミ・世話人会会場と時間

13:15～16:50

1、全水道会館（水道橋駅）・中会議室（5階）
2、JR水道橋駅（東口・お茶の水寄り）下車徒歩2分。
3、都営三田線水道橋駅下車、A1 出口迄は上り階段です。**エレベーター用はA3出口**で徒歩1分
4、電話番号:03-3816-4196

悪玉、高師直を見直す

―改革派政治家の側面―

清野　敬三会員記

◇はじめに◇

高師直（こうのもろなお）には、極悪人のイメージが根強い。南朝正統史観の時代なら、天皇方に叛逆した武将として悪人扱いされるのは分かる。しかし戦後、主君の足利尊氏の株が上がった後も、師直の評判はよろしくない。

これは、どうもその言動が粗野で、暴れ者という評判によるものと思われる。戦いには強いが、寺社を焼き討ちしたり、天皇への暴言があったり、高貴

の女性たちを強引に愛人にしたり等々の理由である。

師直は、ライバルの足利直義(尊氏の弟)と比較対照されることが多い。僕は最初に佐藤進一氏の本を読んだせいか、どうしても秩序を重んずる直義の方に肩入れしてしまう。もっともこれは、「巨人が好きか阪神が好きか」というレベルの話で深い意味はない。

しかし最近は、師直も卓越した改革派の政治家として見直すべきだと感じるようになった。

◇先祖代々、足利家の執事◇

高師直の先祖は天武天皇で、長屋王の流れとされる。高階真人姓を称した後、平安時代には高階氏として受領クラスの中級貴族となった。その後、清和源氏に臣従して前九年や後三年の役にも従軍したという。鎌倉時代に師直の曽祖父高重氏が高氏の宗家となり、足利氏の執事となった。足利氏は膨大な所領と多数の被官を抱えており、高氏嫡流は代々その家政機関や訴訟機関を統括する立場にあった。師直も父師重から足利家の執権職を継承した。

元弘 3 年(1333)主君足利尊氏は、後醍醐天皇に応じ丹波国篠村で幕府に反旗を翻し挙兵した。この時、真っ先に参集した久下時重の笠印「一番」が、頼朝の旗揚げ時に由来することを、師直は尊氏に説明している(『太平記』巻 9)。故実についての知識を披露したこの説話が、師直が史書に登場する最初である。

◇建武政権期での高一族◇

後醍醐の建武政権下では、師直は足利家の執事を務めるだけでなく、政権の公的な職務にも就いた。所領に関する訴訟を司る雑訴決断所に参入した他、窪所・武者所などを担当した。官途としては三河権守、のち武蔵権守となり足利氏を支えた。

建武 2 年(1335)北条時行による中先代の乱が起きた。鎌倉の直義が敗れたため、尊氏は京都を発し鎌倉を奪回し、建武政権からの離脱を明白にする。後醍醐は新田義貞を派遣し、足利方の高師泰(師直の弟、『高階系図』では兄)を敗走させたが、尊氏は箱根竹ノ下の戦いで逆転勝利し、京都に攻め上った。しかし、後醍醐方の北畠顕家が奥州から参戦し、尊氏は西国へ敗走した。

建武 3 年(1336)尊氏は九州で勢力を盛り返し、筑前多々良浜の戦いを制し上洛の途についた。この戦いで師泰は先陣を務めている。上洛に際し、海路の尊氏に師直が従い、陸路の直義に師泰が従った。湊川の戦いでは、楠木正成を自害に追い込んだが、高一族の部下が正成の首を入手したとみられる。『梅松論』に「高尾張守の手の者討取し間、正成が頸持参せられける。」とある。

後醍醐は比叡山に逃れ建武政権は崩壊した。持明院統の光明天皇が即位し、尊氏による室町幕府が発足する。後醍醐は吉野へ移り南朝を建て、南北朝の内乱が始まった。

◇室町幕府での「執事施行状」発給◇

師直は、室町幕府の初代執事となり活動範囲が急拡大した。幕府執事として、師直の最も評価されるものは「執事施行状」の発給である。「執事施行状」とは、恩賞所領の判決を実現するための武力を伴う強制執行である。現在の司法制度でも、例えば金銭請求の裁判に勝って確定判決(債務名義)を得ても、相手が応じなければ金銭を手にできない。さらに執行裁判所で、差押えなどの強制執行の手続きをしなければならない。「執事施行状」はこの強制執行手続きに当たると考えてよい。

鎌倉時代には、土地を恩賞で貰っても強者が不法に占拠していると泣き寝入りせざるを得なかった。しかし室町幕府では政権の基盤を固めるためにも、勝利に貢献した武士に対し恩賞充行を、より実効的に実現する必要があった。師直は、土地給付の強制執行の手続きを簡便化した「執事施行状」を考案し、恩賞充行を円滑に遂行して幕府の求心力も高めるのに寄与した。

官職では、上総守に次いで武蔵守に補任された。武蔵守は、当時武士としては最高位の官職である。

◇軍事的貢献◇

師直は、足利方を代表する筆頭武将であり軍事能力は優れていた。特に、南朝方の北畠顕家を討ち取ったことが注目される。かつて尊氏を九州に追い落とした顕家が、建武 4 年(1337)再度奥州から遠征して京都に迫った時、幕府側は師直が大軍を率いて奈良般若坂で顕家軍を撃破し、翌年和泉国堺浦で顕家を討ち取り、幕府にとっての大きな軍事的脅威を取り除いた。

なお、この戦いで師直は革新的な「分捕切棄の法」を初めて採用している。従来、討取った首は戦いが終わるまで持ち続ける必要があったが、その場で棄てよとする戦功認定法である。合理性を尊ぶ師直ら

しい戦法である。

貞和3年(1347)楠木正行が河内で挙兵した。幕府側は歴戦の勇将細川顕氏が大敗し、援軍山名時氏も敗れた。そこで師泰に交代させ、次いで師直を総大将とする大軍を出陣させた。翌年、四条畷で激戦が行われ、正行以下を敗死させた。

この戦いの後、師泰は河内の南軍を掃討し聖徳太子廟を焼き、師直は吉野に向かい南朝の行宮や蔵王堂をことごとく焼き払い、公家社会に衝撃を与えている。

◇観応の擾乱と師直の死◇

室町幕府初期は、尊氏と直義の二頭政治であった。これがやがて尊氏直系の師直と、直義との対立となり、幕府を二分する権力闘争に発展していった。両者は、性格的にも政策上でも対照的であった。直義が真面目で自制心に富み既存の政治秩序を重んじたのに対し、師直は急進的で古い秩序と権威を否定する人間であった。(佐藤進一『南北朝の動乱』中公文庫)。

暦応4年(1341)直義は、執事施行状の停止命令を出し、師直の権限を縮小した。しかし、師直は命令を無視し発給を継続し、直義との対立が表面化した。直義による師直暗殺未遂疑惑も起きた。

貞和5年(1349)師直はついに執事職を解任された。それに反発した師直は大軍を率いて直義邸に押し掛け、直義が逃避した尊氏邸を包囲した。結局、尊氏の斡旋で直義は引退し、尊氏の嫡男義詮(よしあきら)がその地位を引き継ぐことで決着した。このクーデターで師直は執事に復帰し、師直派の圧勝に終わった。

一方、直義の養子直冬(ただふゆ)(尊氏の庶子)が九州を席巻し、直義派として勢力を増してきた。観応元年(1350)将軍尊氏は、師直らを率い西国に向け出陣した。その直前、直義は京都を脱出し、南朝に帰順し勢力を盛り返した。尊氏・師直軍は備前国から引き返し、翌観応2年、直義軍と摂津国打出浜で一大決戦を展開した。激戦の後、師直・師泰が負傷し戦意を喪失し、二人が出家することで和睦が成立した。しかし、師直一行は帰京の途中、武庫川辺で直義派の軍勢により斬殺された。

◇師直の悪評の数々◇

師直の悪評を高めた逸話に、天皇を誹謗した有名な暴言がある。『太平記』巻26に「もし王なくて叶ふまじき道理あらば、木を以って造るか、金を以って鋳るかして、生きた院・国王をば、いづかたへも皆流し捨てたてまつらばや」とある。もし天皇が必要なら木か金で人形を作り、生身の上皇や天皇はどこかへ流してしまえ、と師直が放言したと云う。たしかに「神聖ニシテ侵スヘカラス」の天皇なら、まさに不敬罪に相当する大罪である。しかし「日本国の象徴」の天皇なら、シンボルという意味で師直の言に通ずるものがあろう。

師直は乱暴で女癖が悪かったとも云う。一条今出川に豪邸を構え、多くの皇女腹の女性姫君を数多く隠し置き夜毎に通ったとされる。これを見て、京童は「執事の宮腹巡(めぐ)り」と嘲笑したと云う。特に二条前関白の妹を盗み出して男児を生ませたのを『太平記』は「あさましやな」と嘆いている。しかし、これらのことは当時の権力者なら、程度の差こそあれ誰でもやっていたことであろう。

後世の人々に、師直を悪人と印象づけた最大のものは、江戸時代の『仮名手本忠臣蔵』である。敵討ちの相手吉良上野介を高師直としたため、師直＝悪人という評価が定着してしまった。師直にとっては、とんだ災難である。

石清水八幡宮や吉野行宮・蔵王堂の焼き討ちなども、寺社勢力からの非難囂々である。しかし、敵がそこに籠る以上、焼打ちは戦術的にやむを得ないものである。むしろ、そこに籠り聖域(アジール)を防壁とし武器とした相手方にこそ、焼失の責任はあろう。

◇師直の教養と業績◇

師直は粗野な乱暴者の印象があるが、当時の武将としては豊かな教養を備えていた。高家は足利家の執事の家柄であり、笠印「一番」の由来を披歴したように、全国の武家の故実についても豊富な知識をもっていた。

また、師直は和歌を詠む環境に育った文化人・風流人であった。和歌は北朝の勅撰和歌集の『風雅和歌集』にも入撰している。「天くだる　あら人神のしるしあれば　世に高き名はあらはれにけり」は、難敵北畠顕家を倒した時の歌である。

合理的な精神の持主ではあるが、神仏への信仰心も充分持っていた。臨済宗に帰依し、京都十刹の一つ真如寺の創建が特筆されるが、禅宗の経典の注釈書である『首楞厳義疏注経(しゅりょうごんぎしょ)』も出版している。

当時の武士にとって公平な恩賞配分こそ最重要

課題であり、「執事施行状」の創設は室町幕府の求心力を高め、これが後に管領制度に発展していく。師直は、単に軍事面だけではなく、行政面からも幕府草創期の政権基盤の確立に貢献した改革派の政治家であったと云えよう。了

【蛇足】

師直を、昨今の政治家になぞらえると米国のトランプに似ているかなと思う。あの行儀の悪さや破壊力、それに女癖の悪さや一部の熱烈な信奉者がいることなど、通ずるものがありそうだ。対して、既存の秩序を重んじ知識層に支持される直義は、さしずめバイデンか。　以上

8月ゼミは、猛暑予想の為休講とします。

以上で本号の記事終り。